

現在鶴

シテ

鶴

ワキ

頼政

ワキツレ

大臣

ワキツレ

猪の早太

時 所 山城禁中
五月

大臣

「抑これは近衛の院に仕へ奉る臣下なり。君此間御

惱にて渡らせ給ひ候。或人奏して曰く。東三条の

林頭より。黒雲一むら飛び來り。御殿の上に覆へ

ばおびえさせ給ふ由を奏す。昔冷泉院御惱にて渡

らせ給ひし時。前の陸奥の守源義家君を守護し申

すに。たとひ天魔鬼神なりとも。如何でか近づけ

奉らんとて。弓の絃うち三度せられければ。御惱

たちまち怠らせ給ふ其例に任せ。兵庫の頭源の頼

政を召され。彼化生の者を射させらるべきとの宣
旨を蒙り候間。頼政を召し出し。宣旨の趣申付
けばやと存候。如何に頼政。

ワキ
「御前に候。」

大臣

「これは宣旨にて候。君此程御惱に渡らせ給ひ候。

或人奏して曰く。東三条の林頭より。黒雲一むら
飛來り。御殿の上におほへば則ちおびえさせ給ふ
由を申す。頼政を召し彼化生の者を射させらるべ

きとの御事にて候。

ワキ「宣旨畏つて承り候。さりながら。未だ目に見ぬ化

生の者。射よとの宣旨こそ然るべからず候へ。

大臣「げにく申す所はさる事なれども。伝へ聞く紀伊の国にも。化生を亡し、先例あり。

ワキ「實にく聞けば紀の国に。山蜘蛛多く集り。く。

是朝敵の初と云へり。

大臣「今は国土も治りて。

ワキ「靡き従ふ時なれや。

地「万代の例にぞ引く桑の弓。く。蓬のやしま治りて。國豊なる御代とてや民も榮ゆる時有りて。道々たれば家々の。風を伝ふる有り難や。く。
ワキ「然れば天神七代。地神五代の世々迄も。

地「なゝしの雉も矢に当りて。天下を治めし。例とかや。

クセ「けいやう射術と伝へては其名を雲の上にあぐ。

ワキ 「されば愛染明王は。

地「定の弓恵の矢にて悪魔を払ひ給へり。神功皇后新羅を従へ給ひし其昔。御弓の筈にて岩崛に異国の戎は日の本の狗なりと書きし文字の姿。今の世に残ることぞ動なき國の例なれ。

大臣「如何に頼政。急ぎ我家に帰り用意仕り候へ。

ワキ「畏つて候。

一聲ワキ 「扱も頼政思はざる宣旨を蒙り。魚鱗の狩衣に重籠

の弓持ちて。山鳥の羽にて矧いだる尖矢二つ取り添へ。頼みたる郎等には。

ツレ「遠江の国の人猪の早太に。

ワキ「ほろの風切にて矧いだる矢を負はせて。唯一人ぞ召具したる。

地「かゝりければ夜も更けて。俄に落ち来る雨風の音。

すはや時節と待ちかけたり。不思議や更け行く月

影の。く。

シテ
「光をますかと見えつるが。

地
「東三条の林頭よりも。黒雲一むら飛び來り御殿の
上にぞ。かゝりける。

ワキ
「其時頼政祈念して。

地
「其時頼政祈念して。南無や八幡大菩薩。化生の真
中射させてたべと。眼を開きよく／＼見れば。頭
は猿尾は蛇。足手は虎の如くなるが。啼く声鶴に
似たりけり。尖矢つがつてよつ引きしほり。化生

の真中ひやうばつと射通され。起きつ転びつ御殿
の上を。走り廻るが暫しもたまらず。逆様に落ち
けるを猪早太つと寄り腰の刀に刺しとめければ。
弓箭の家に頼政が勢讃めぬ人こそなかりけれ。